
遺されたモノ

和泉 優衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遺されたモノ

【Zコード】

Z2178

【作者名】

和泉 優衣

【あらすじ】

工藤新一と毛利蘭は結婚し、平凡な日々を送っていた。

ある日新一が蘭に離婚しようと言つた。・・・。

新蘭です／＼(^○^)／＼

毛利蘭と工藤新一が結婚したのは今から1年ほど前だ。

高校を卒業して、新一は探偵事務所を開いた。

とても評判がよくて依頼人が多かつた。

そのせいで時間をなかなか作ることができなくて、2人はなかなか会えなかつた。

しかし2人の縁は切れることがなかつた。

お互い20歳になつた頃、新一からのプロポーズで結婚を約束した。

お互いの親に挨拶しに行くと、小五郎がかなり泣つていたが最後には了承してくれた。

全てが順調だつた。

子供も1人目が蘭のお腹のなかに居てあとヶ月で生まれる。

2人とも楽しみで仕方なかつた。

「新一。今日も依頼人の家に行くの?」

「あ、いや・・・。今日予約は入つてないんだ。」

「そつなの?じゃあさ、久しぶりに一緒に買い物行かない?」

「え、あの・・・。ごめん。仕事はないけど行くとこあつて・・・。

「

「そつか~。残念。また今度だね!」

「ああ。『めんな!』

新一、仕事以外の用事なんてめずらし……

俺が今から行くところは、灰原哀……いや、宮野志保のところだ。

組織崩壊後、完成させたAPT-X4869の解毒剤で元の体に戻つて、現在は病院を経営している。

今日は久しぶりにその宮野に会いに行くのだ。

宮野は信頼も厚く、待ち合いで室の患者の数はたくさんだった。

「 ト藤新一様～。」

やつと以前を呼ばれたので診察室まで行つた。

消毒液の匂いで包まれたこの部屋の奥には懐かしい顔があった。

「 久しぶりだな・・・ 富野。お前、黒じやなくて白も似合つんだな。」

「

「 セうかしらへとじるで・・・ ト藤くんから来るなんて珍しいわね・・・ といつより初めてかしらへ。」

「 そうだな。事件ばっかりで病院開いたつて聞いてもなかなか来れなかつたんだよ。・・・ それより、富野に相談があるんだけど・・・ 」

「

「 それって蘭さんのこと?」

「 蘭は直接的には関係ない。けど結果によつては巻き込むことになるのかな・・・。」

01・名探偵の相談（後書き）

久しぶりですね！

最近何の作品も書いていなかつたのですが、感想やリクエストをくれた方が居て、とてもうれしかつたです。

リクエストについて話すとこれから内容が分かってしまうので、また後日触れさせていただきます。

この話はもう最後の方まで書きおわつてるので更新も早くできそうです。

頑張るので次も見てください！

02・置きたくない

「ただいま。」

「お帰り、新一。早かつたんだね。」

「今日は一緒に買い物行けなくてごめん・・・。」

「仕方ないよ～。今度出かけようつね～。」

「ああ・・・。」

いつもよつよつしてテンションが低い新一に蘭は疑問を抱いた。

「・・・じつかしたの?」

「わりこ。もう行けない・・・。」

「え?」

「 もういい。・・・出掛けられるとねーよ。」

「 なんで? 大きな事件あつたっけ? またこの前みたいに一ヶ用くら
いの出張でもあるの? 」

「 違うひけだ・・・。」

「 え・・・じやあや、出掛けられないほど読みたい小説でも出来た
の? 」

「 ・・・ 」 むん。」

新一はその一言を放つたあと、自分の部屋に入つて行ってしまった。

新一はなんで謝ったの?

新一、用事もないのに断つたのかなあ?

あ・・・もしかして嫌われたのかな。

嫌いになつたから一緒に出かけたくなかつたのかな・・・。

私、新一に何かしちやつたのかな・・・?

なら謝りなきや・・・。

新一の部屋の前まで来て、勇気を出して名前を呼んだ。

「しん
。」

しかしながら前を最後まで言い終わらないうつり私は呼ぶのをやめた。

新一は誰かと電話しているみたいだったから。

息を潜めて会話を聞く。

「離婚し……がいいのかな。このままじやだめだよな……。」

離婚 ?

新一は何をいつてゐるの?

誰と電話で話してゐるの?

「こきなり……の前から居な……より離婚……俺の事忘れて
もういたほうがいいんだよな……。」

どうこいつひと……?

なんで……?分からなによ……。

「好きなんだよ・・・だから離婚する・・・いいんだよな。

「

「新一・・・？」

普段新一が口にしない離婚といつ言葉が何度も聞き取れたから、自分でも驚いて思わず小さく言葉を発してしまっていた。

「ああ。わりい・・・。ちょっとあれだから、また今度・・・。」

新一は私の声に気付いたようで、電話を終わらせた。

自分でもやつてしまつたと思つた。

「」新一に話しかけても何から聞けば良いのか分からない。

電話の内容はよく聞き取れなかつたけど、離婚とか言つてたから私の話してたんでしょう？

何を話せば・・・。

「何？」

新一が部屋のドアを開けて最初に放った一言。

それはいつも優しい新一の声ではなく、不機嫌な感じの声だった。

「え・・・。」

「用ないなら俺が言つ。俺たちさ・・・。」

新一のこんな怖い声、聞いたことない。

「嫌・・・一言わないで・・・。」

言われることはなんとなく分かっていた。

“離婚しよう”

でも実際に言われてしまつとどうなるか分からなくて・・・。

出来れば聞きたくなかった。

「 『めん。』

頭では分かっていても心がついていけない。

もう終わりなんだ、戻れないんだ、と思いつて悲しくなって、思わず泣いてしまった。

「 ッ・・・。泣くなよ。

・・・。」

蘭は悪くねーよ。俺が全部悪いから・

新一が泣かせたのに。

泣くなよってなによー！

泣くのもダメなんだ・・・?

「 なんで?・・・なんで離婚しなきゃいけないの?」

新一は首を横に振るだけで何も答えてはくれなかつた。

02・聞きたくない（後書き）

HAPPY NEW YEAR \ (^o^) /

長文で書いひつと思つてゐるんですけど、なかなか長くならないです（

毎回凶んでるんですけど、

あとがきつて何書けばいいんですかね？（へへ）

つて事でアンケートとつま

皆さんが名探偵コナンで一番好きなCPはどれですか？

メツセージでも感想の所でもいいので教えて下さい！

次回はそれについて話題にします

1
/
1

03・忘れられない

あの日の次の日に目覚めたら置き手紙があつて新一は居なくなっていた。

蘭へ

本当に元気めでた。

とつあえず出でくよ。

こんな俺じや蘭を幸せに

する資格ないからや。

俺が全部悪いから。

蘭は悩まなくていい。

離婚とか親権はまた話そ'。

一つ言ひとおくナビ、

俺が蘭を好きだったのは
本当だから。

でも早く忘れてくれ。

他の良い奴見つけろよ。

新一

この手紙を読んで本当に新一が分からなくなつた。

その日以来あまり外に出なくなつた私に少なからず疑問に思つていた園子は食事に誘つてきた。

半ば強引に連れ出されたというのが本当のところだが、その行為は
ありがとうございました。

最初は同級生のあの人気が結婚したとか、他愛ない会話をしていたの
だが、その辺りの会話が一段落した時に園子が話題を変えた。つい
に核心をついてきたのだ。

「……で、何かあつたんでしょ？」

「え？」

いきなりその話題に変わったので焦りを隠せなかつた。

「とほけても無駄よ。顔に書いてあるんだから。上藤くんでしょ？」

「園子は何でもお見通しだね。」

「蘭はいつも工藤くんの事しか考えてないでしょ？」

「そ、そんな」とないわよ！」

「まこと。こなは。」やうごう事にしておくね。・・・で?「

「理由も言わずにね、離婚しようって言つてましたの……。」「

「心当たつは無いの？」

「うん……。それでその話された次の日に新一、出でつちゃった。

「

「離婚切り出されるような事して覚えてないはずないよね……。蘭は悪くないよ。どうせ他に好きな女が出来たのよ。最低な奴。」

「新一を悪く言わないで……。」

「じめん。でも現に出でつちゃつたんでしょ？工藤くんにやましい所があるんだよ。女じやなかつたとしても……。だからあんなやつなんて忘れちゃいなよ。私がもつといい男紹介してあげるから。」

「……うん。」

園子はあの日以来積極的に遊びに誘ってくれる。

2人きりで買い物や食事をしたりが多かつたけど、合コンとかにも誘われた。

園子が集めた合コンのメンバーはさすが鈴木財閥！と言える面々で、

スポーツ選手、公務員、大富豪など、そこにいる私が恥ずかしいくらいで、その人たちと結婚したら幸せになれるのだろうけど……。

でもそこに行くたびに感じる」とがあった。

新一と違う。

当たり前のことだ、むしろ一緒に困るのだが、そういう意味でなく、新一以外の人ではダメだった。

新一じゃないと私を幸せに出来ないんだ。

時間がたつても忘れられない。

なんで……。

あの日に何かあつたのかな?

“誰かと電話してた日”に

「あれって・・・？」

ふと前を見ると、私が歩いている道のずっと前の方に見覚えのある、私の親友を裏切った最低な男がいた。

工藤くん・・・！

しかし、工藤くんの横には誰かが居た。

今日は蘭と一緒に歩いているのは紛れもなく女の人だった。

工藤くんの隣で一緒に歩いているのは紛れもなく女の人だった。

あれは有希子おばさまじゃない。

そしてよく見るとその女人には見覚えがあった。

03・忘れられない（後書き）

メッセージありがとうございました。

数人だつたので何ともいえないのですが、

新蘭、新志が多かつたですね。

私はやつぱり新蘭が1番好きです！

でも他のCPでも読みます(、 、)

ああ、次は何のアンケートとつましょつか ． ． ． (—) ．

いま考へつかないので、話題は次回考えます

感想、メッセージお待ちしております。

あ、まだCPのアンケート続いてますよ (^ - ^)

まだ答えてない人はぜひ！

じゃあまた次回に。

工藤くんと歩いているのは数年前に近くにできた病院の先生。

とても人気があって、町内の広報に写真とインタビューが載つてた
もの。見間違えるわけがない。

やっぱ女か。

工藤くんに確かめたかった。

しつかり工藤くんの口から言わせたかった。

「工藤くん！」

緊張して声が少し上ずつたが気にせず大きめな声で呼んだ。

私の声に気が付いたようでもうくつこう振り返る。

「園子・・・！」

「工藤くん、話があるんだけど。」

「……工藤くん、私邪魔になるから失礼するわね。用も済んだし。あの時間だけは守ってね。」

あの女の人が帰つたので2人きりになつた。

あの人気が居たほうが気まずいのだろうが。

2人は喫茶店に入つて飲み物を頼んだ。

しらけた空氣を打ち破つたのは工藤くんだった。

「あのや、園子にこなこと聞くのも悪いんだけど、蘭は元氣か？」

「え？ 蘭？」

なんで蘭の事を聞くんだろう？

蘭よりあの女の方が好きだから離婚切り出したんじゃないの?

罪悪感か。

一方的にやつたから?

「蘭から聞いてるだろ?・話。」

「え、うん。出でつちゃつた、つてやつでしょ? 蘭、ショック受けたよ。家に引きもつてたし。」

「そつか・・・。俺、最低だよな。」

「最低よ。蘭の事大切にするんじゃなかつたの? 確か結婚する前にそんな事言つてたわよね? なのに女が出来るなんて!」

「え? 女?」

「とぼける気? もてる男は良いわよね。有名な探偵ですもんね! 蘭を捨てて乗り換え出来るからね!」

「あ、そうか。富野の事が。そう見ても仕方ないか。年も近いしな。」

” そう見ても仕方ない” つて事は・・・。

「じゅあ違つの?」

「別に女なんて出来てねーよ。園子が思つてるほど俺つてもてねーよ?」

「工藤くんの知らなこといつでもしてるのよ。・・・女じやないならなんで?」

「なんでって・・・。」

「言えないの? 蘭にも言わないで勝手に話進めて、それで良いと思つてゐる? 蘭は・・・私の前では明るく振る舞つてゐるけど、多分苦しんでる。私じゃ助けられないんだよ。工藤くんじやなきやーせめて理由くらこ言わないと、蘭も私も納得できない。」

「蘭には俺から言つから、言わないでくれるか?」

「絶対、蘭に言いたいな。それなら言わないでおくれ。」

え
？

聞いた瞬間衝撃が走った。

工藤くんが蘭に別れを告げたのはじつかりした理由があつたんだ。

「工藤くん。これは私の口から蘭には言わないから安心して。というよりは、"言えない"の方が正しいかな。でもこの話、早く蘭に言わないと後悔すると思う。取り返しの付かないことになつても良いの？」

「やう・・・だよな。言わないままよな。」

「うふ。言こづらこねだ・・・ね。」

「ああ。今日はありがとな。園子。」

「うううううう。話聞けてよかつたよ。。」

勘違いしてた。工藤くんが悪いと思つてた。

工藤くんも悩んでたんだ。。。

04・話を聞かせて（後書き）

CPはカップリングの事です^ ^

分からなかつた方ごめんなさい；
ていうか更新遅かつたですかね。。。

今度は早くできるはずです(^ ^) /

感想・評価よろしくお願いします(^ー^)

05・信じられない

工藤くん、蘭に連絡したかな？

R R R R R . .

着信音が流れたので携帯のディスプレイを見ると、毛利蘭と表示されていた。

蘭から電話なんてめったに無い。

いつもメールでやつとつしてたのじりしたんだろ？

「もしもし。蘭が電話なんて珍しいね。どうかした？」

（あれ、園子。今日新一と会ったでしょ？）

「え、うん。」

（やつぱり。酷いよ。まさか園子だと思わなかつた。）

「え？」

一瞬何の事が分からなかつたけど、すべに理解することができた。

勘違いされた

。

普段の明るい声でその話をされたからてつきつ藤くんから連絡を受けたのかと思って話してしまつた。

蘭は多分、私と藤くんにそこは見つめたんだけれど、

「蘭。私と藤くんにそこは見つめたんだけれど、ただの勘違いだよ。」

（嘘だよ。だつて私見たんだよ？）

「喫茶店に面のを見た？」

(うん・・・。)

「工藤くんね、蘭のこと聞いてきたの。“蘭は元気か？”って。それで、“ショック受けてたよ”って言つたら、“俺最低だよな”って。蘭のこと気にしてるんだよ。」

(そんなの信じられないよ・・・。)

「じゃあ本人から聞きなよ。工藤くんの家に行つてさ。やつすれば信じてくれるしょ？」

(・・・うん。いきなり行つても大丈夫かなあ？)

「大丈夫だよ。本当に蘭のこと気にしてたから。いきなり行つても平氣だと思つ。」

(そつか。行つてみる。バイバイ。)

「バイバイ。」

大丈夫かな。

工藤くん、しつかり話すかな？

ピンポーン

（　　はい。）

インター ホンを押して返事をしたのは女人の人だつた。

「新一？・・・じゃないよね、え？あの、新一に話があつて・・・。

」

（　　開いてるから、適当に入つて。）

玄関に居たのはさつきの女人。その人に会つて初めて言われた言葉に驚いた。

「ここにちは。毛利蘭さんですよね？」

「……え？」

「あなたのことは知つてるわよ。工藤くんからたくさん聞いてるも。そろそろ来るんじゃないかと思つてたわ。」

新一が……私の話をこの人に？

なんで……？

「新一はあなたのせいで私に別れようつていったの……？」

「……知りたい？」

「え？」

「工藤くんがなんであなたの前から居なくなつたのか。」

知りたいよ。

でも聞きたくないよ。

あの手紙に書いてある事は全部嘘で、他に好きな人が出来たのかも
しれない。

理由が分からない。

でも・・・。

怖いよ・・・。

「教えて下さい。」

「あなたの人生が変わってしまつかもしれないけどいいの？」

「いま理由を聞かなかつたら後悔するんです。じゃないと諦められ
ない・・・。1人で生きてく決心ができないよ・・・。」

「分かったわ。工藤くんは 。」

「え・・・?」

予想もしていなかつた言葉を聞いた。

「つかひ・・・?」

思ひ返せば心当たりはたくさんあつたんだ・・・。

05・信じられない（後書き）

早く更新できるとか嬉しいなー！めでなめで。

遅くなりました（）

文章の区切りがいいところが分からなかつたのでいつもよつと頑め
なつてしましました（／＼；）

感想・評価お待ちしています！

はねて喜びます／＼＼＼

06・逝かないで？

「はやく来て、上藤くん。蘭さんが待ってるから。」

「町野さんが寝てこる新一を呼びに行つてくれた。

「…・新一。」

田の前に現れた新一は心なしか痩せたよつて思つ。

もともと細い体つきの気がしてこたナビ・・・。

「あ、上藤くん。私は用事あるから帰るわね。頑張つて。」

「え、おこ町野？」

多分富野さんに用事なんかない。

私と新一を2人きりにしてくれたんだよね？

「・・・ねえ。新一？」

「何？」

「新一はさ、私のこと嫌い？」

「・・・んな」とねえよ。富野に聞いた？全部あいつが話したんだろ？」

「聞いたけど・・・。本当なの？」

「ああ。」めん。

「そつか・・・。」

（工藤くんは病気なのよ。それで蘭さんに迷惑をかけてしまうと思つて蘭さんから離れて行つたのよ。）

（迷惑なんて 。）

（例えば、病気のせいで工藤くんが衰弱してつたとしたら・・・蘭さんは見ていられる？大切な幼なじみが寝たきりになつて、苦しんで、ついには話すことすら苦になるかも知れない。 。そしたら、もう耐えきれないでしじう？）

（ そんなことひ ）

（あなたは幸せよね。まだ大切な人を失つていないんだもの。・・・でもあなたが悲しむ姿は見たくない。）

耐えきれなくなる？病気だから？

病気でも新一は新一だよ・・・。

ずっと一緒に居れないんだ?

長く生きられないんだよね。。。

いつの間にか新一はソファーに横になつていて眠っていた。

やつぱり、顔色悪いよね。。。

新一が病氣とこいつを嫌でも分かつてしまつ。

「新一。。逝かないで。。。1人にしないで。。。」

まだ、死ぬには早いよ。。。

「めんなさい！」

書いたやつを読み直してたら、おかしい所があつて、修正とかしてたらこんなに遅く・・・(へへへ；；)

すみません、言い訳しました。

久しぶりの更新なのに短い文章+駄文で大変なことに(。)

次回も読んでください嬉しいです（ー；）

07・気になること

起きると朝で、俺はソファーではなくベッドの上だった。

蘭は 帰つたみてえ。

昨日は蘭に久しぶりに会って、緊張して、何から話していいか分からなかつた。

満足に話さないまま眠気が来て・・・。

耳の奥に残る蘭の声 。

逝かないで・・・。1人にしないで

どうこうことだ?

逝かないで つて

もしかしてあいつ・・・・?

「・・・・ツ」

突然心臓が痛くなつた。呼吸が苦しい。

宮野がくれた痛み止め飲まないと

。

コップに水を入れて、薬の瓶を取り出す。

瓶のふたを開けたいのに意識が朦朧としてよく見えない。

そして何より、力が入らなくなつていた。

早く薬を飲みたいのに・・・。

『気がつくと俺は田ごベジの上だった。

左手には点滴。

息吸うのが楽だと思ったら酸素マスクもつけられてるみてえ。

「工藤くん。気が付いた?」

「高野?」「は? なんで俺?」

「Jリーカ博士の家よ。・・・工藤くん、最近薬飲み忘れたことがある?」

「・・・Jリーカの前仕事行くとき持つてくの忘れた・・・。」

「あのねえ。薬なくしたり忘れたりしたら連絡しなさいっていったでしょ? 倒れられるほうが迷惑なのよ?」

「一回くじらこ良いかなって思つて……。」

「まあ、確かに薬飲み忘れただけじゃ普通なら倒れたりしないわよ。でもね、工藤くん。あなたあんまり寝てないでしょ？」

「なんで知つて……。」

「分かるわよ。最近、あなたが大好きな推理小説の発売ラッシュだつたじゃない。どうせ全部買つたんでしょう、夜まで電気ついてるあなたの家を見ればすぐに理解出来たわよ。そんなんじゃ睡眠とれるわけ無いでしょ。」

「……読まれまくじりじゃねーかよ。」

「それに……。工藤くん。あなたはさつき“この前仕事行つたとき”って言つたけど、警視庁に行つたの？病気療養のためつて言って、仕事回さないようにこじつてもうつたんじゃなかつたの？」

「確かに仕事は来ないように頼んだけど
件の詳細の報告をしてに行つたんだよ。やつこいつのを電話でするのつてよくないだろ？」「前に担当した事

「まあ、盗聴とかされてたりしたら大変だものね・・・。」

「ああ。それにその時はちょっと顔色が悪いってだけで田畠警部とかがすゞぐ心配してくれて。無理はしない。」

「・・・まあこれから気を付けてくれればいいわ。それより、蘭さん呼んでくるわ。あなたのことすゞい心配してた。」

「蘭が？」

「ええ。私は研究があるから2人でゆつくりするといいわよ。」

蘭はすぐ外に居たのだろうか、富野が出ていつてからすぐに入ってきた。

「新一ーもう大丈夫なの？」

「ああ。」

「びっくりしたんだよ！？朝、新一の家に行つたら、新一が胸押されて倒れてるし、呼吸も浅くて・・・。顔色すこい悪くて・・・。なんで自殺なんかするのよ！？」

「・・・自殺なんてしてねーよ。」

「だつて薬が！薬が床にいっぱい散らかってたじやない。水もこぼれてて・・・。」

「散らかした覚えはねえけど・・・これなり苦しくなつてさ、痛み止め飲もうとして焦つてさ、そのうち意識がはつきりしなくなつて散らかっちゃつたんだよな。多分・・・それじゃあそつ見えてもおかしくないか。」

「自殺なんてしないでね？新一はまだ生きなきやダメだよ・・・。死なないで・・・。」

「蘭はや、俺が死ぬつて思つてるの？？」

「え、だつて病氣つて・・・。」

「・・・そつか。」

でもなんでこんなこと・・・?

あいつに聞かないといけないな。

宮野に・・・。

07・仮想空間（後書き）

遅い・・・ですかね。

「ねんなで」。

「お」の話はどこのへりこまで来てるのかが分かりません（、 、 ）

「」の話のリストの構想が2つになってしまったんですね（、 、 ； 、 ）

「」や「」で終わるかは考え中です・・・（ ^ ^ ; ;

メッセージ、励みになっています
感想かいて下さると嬉しいです！

「・・・・西野。」

「あら、なあにって改めっちゃって。」

「蘭に俺のことなんて伝えた?」

「・・・病気って言つただけよ。」

「あんなあ・・・。」

「嘘はつこてないつもりか? 蘭、俺が病気で死ぬと思ってたん
? 何に不満があるってこの?..」

「分かつてて言わねえつもりか? 蘭、俺が病気で死ぬと思ってたん
だよ。もつ、治らない病気だつて・・・。」

「私は治らないなんて一言も言つてないわよ。」

「じゃあなんで蘭は・・・！」

「そんなカリカリしなくても良いじゃない。ちょっと、例え話をしただけよ。工藤くんが病氣で寝たきりになる話をね。」

「なんでそんなこと・・・。」

「もしもって事があるじゃない。心の準備つてものも必要なのよ。あなたも蘭さんもまだ失つてないじゃない。分からせたかったの。大切な人が居なくなるつて事はどういう事か・・・。」

「え？」

「両親が居て、蘭さんが居て、信頼できる仲間もいる。みんな・・・まだ居るじゃない。私にはもう・・・。」

「じめん。でも居るじゃねーか。ここ。俺はおまえの相棒だぜ？」

「そう言つてくれると助かるわ。大切な人が居なくなるつて事、少しは考えた方がいいわよ。絶対その時に楽になるはずよ。それにあなたは謝らなくていいのよ。」

「なんで？」

「分からせるためだけじゃなかつたのよ。私、工藤君と蘭さんがうらやましかつたのかもしれない。だから少し意地悪しちやつたの。あんなに待たせても待つてくれるなんて素敵よね。私もそういう人欲しいわ。」

「あんまり気にしなくていいからな。実際さ、この病気も俺の生活のやりようによつては治んねーんだろ? 現こつきも発作起きちまつたし。」「

「まあ、やうね。生活態度改めればすぐこでも治つやうなものだけだ。でも治つたらすぐこで

「あ、それだけは蘭に言つなんよ。絶対引き止めらられるから。」

「だからつて、言わないつもり?」

「わかんねえ。でも多分言わないな。」

「・・・やつやつて心配ばつかりかけて、待つてるやつの気持ちも考えなきことよ。」

「いや、今回までは待つてなんていわねーよ。」

「え、じゅあ・・・。」

「ああ。今度こそ終わりだな。」

08・嘘は言わない（後書き）

今日は遅くならずにすみました（^ ^ ;

あんまり話が進んでない気もしますが・・・。

4月前には完結にしたいです。

感想・評価・メッセージ、励みになつてます（^ O ^）

2 / 1

倒れてから2日。

まだ外に出るのは許されていない。

それどころか

「おまよ。工藤くん……じい？」

「おまよ。町野。じいじ……普通……だな。」

「やつ。まあ今から調べるんだけじね。」

と言われ体温計を渡された。

そもそも調べるんだつたら俺に聞く意味ない……と思つたが、口に出すのはやめておいた。

「 なにか異常あるか?」

「 あつても多分言わないわよ。」

「 あ・・・えい。」

「 体温は?」

「 35・2」

「 低いわね 。 しつかり飯は食べてるの?」

「 こやみかよ。」

あの日以来栄養は注射と点滴からとつてこる。

食べても吐いてしまつ。

「 あなたが食べてくれないと、私のせいになるじゃない。 実際私のせいなんだけど 」

「ひれひて薬のせこっ。それとも病気のせこっ？」

「薬よ。多分薬が効いてるから 副作用ね。もつもつすれば食べるよにならはすなんだけど。」

「や・・・か。」

「新一。ひつこえぱぱわ・・・。」

「ひつした?」

「園子がね、私たちの」と心配してたよ。」

「え、あこつが?」

「「」の前会つたでしょ？それで 。」

「あいつ、何か俺の事言つてたか？」

「ううん。私がね、待ち歩いて2人で居るところ見て、勘違いしちやつて・・・。それで園子に問い合わせたんだけど係もつてゐつて思つて責めちゃつたから 。」

「「」めん・・・。」

「新一は謝ることないよ。勘違いした私が悪いし子に謝つてきたの。」

「園子、「」めん。」

「うん。大丈夫？しつかり話した？」

「うん。やっぱり新一。。。

「ねえ蘭。子供、あと5ヶ月だけ？」

「うん。5ヶ月。。。

「蘭、私は別に気にしてないから、私のことより子供のこと考えないと。。。あんまり無理しちゃダメなんだよ。。。？」

「ありがと。」

子供か

。

しつかりしないと

。

「警視庁の人でしょ？」

「あー、別に普通の。

「誰と電話？」

「あ、もしもし。工藤です。あー、すみません
氣ですよ はは そんなに心配しなくても
り返し連絡しますね 失礼します・・・」

（新一、今ぼーっとしてた？？考え方
？）

「え、ああ、ありがと。」

「新一、携帯鳴ってるけど・・・出なくていいの？」

「えつ？・・・なんで？」

「だつて新一、言葉が丁寧だつたし。大体新一と電話する人は限ら
れてるじゃない。」

「 そか？」

（こつもの新一なら、誰だか教えてくれるのに・・・なんで隠すの
？）

新一、おかしい。

知られたくないことでもあるんだ。

悪いと思いながらも新一が寝てる時に新一の携帯の着信履歴を見て
しまった。

さつき電話は警視庁からじやなかつた。

なんで？

確かに、そう表示されてたんだ

F B I J a m e s B l a c k

。

09・隠しておると（後書き）

読んで分かりにくい所あつたら「みんなさいみ（――）み

激しく表現力欲しいです(、；；)

感想・評価・メッセージありがとうございます(*＼＼*)

次回も頑張ります

2 / 11

10・終わらせたい

なんでFBIの人から電話なんて来るの？

いくら新一でもFBIまでは関係ないでしょ・・・。

といつよりも、新一は仕事を入れないよつとしてるって・・・。

それなのに電話が来るっておかしくない？

何を隠してるの・・・？

。 。 。
その謎は解けることは無かつた

あれから約1ヶ月。

病気の方はほとんど良くなつて、発作もあれ以来起きていない。

薬は今でも服用しているけど、ずいぶんと量が減つた。

だから。

「すみません。ジョイムズさん、今大丈夫ですか？
う大分よくなりました。えつと・・・はい。日曜日の
かりました。準備しておきます。」

分も

だからそろそろやうなきやなつて。

もつすべ

。

この時を3年間ずっと待つてたんだ。

「快斗・・・今大丈夫か?」

(なあに?新一から電話なんて珍しいじゃん。)

「お前にしか頼めねえ事があるんだよ。」

(それって。。。今から行けばいい?)

「ああ。よろしく。」

こつちも準備しておかないとな・・・。

・・・来んの速えよ。

「しーんいち！ 来たよー。」

「・・・速いな。」

「だって電話中に既に走りだしてたし・・・ぶつ飛ばしちゃった。」

「そんなことしたら警察に捕まるから。」

「捕まつたら新一が助けてくれるでしょ？」

「あ、なあ・・・。俺は探偵だぜ? どうやつて・・・。」

「警察に知り合いとか居るんでしょ?」「ネで。。。

「無理。どんなコネだよ。てか、使わないし捕まらないし。大体快

斗なら捕まつても逃げれるだろ？怪盗KIDなんだから。」

「……もつすべ、『元怪盗KID』になるけどな。」

「元つてお前……辞めんのか？」

「今度の日曜日ね。」

「もしかしてお前もつ

「行くよ。だつてやつと睨つけたんだよ。」

「じゃあ一緒にいこう……。ぶつ瀆しい。」

「富野、来たよ。」

「あら、遅かつたじゃない。てっきり検診をほつたのかと思つたわ。」

「

「んな訳ねえって。さほつたら後々怖いのは知つてゐるから。今日は用事があつたんだよ。」

「知つてゐるわよ。怪盗さん来てたものね。」

「なんで知つてゐるんだよ?」

「そんなの、バイクの音がうるさくて外見たら丁度貴方の家の前にそのバイクがとまって、乗つてた人見ればすぐに怪盗さんだつて分かつたわよ。」

「あいつ、すゞい飛ばしたみたいだしな。」

「で、何してたの?」

「準備。快斗にさ

。」

「つひ」とせそりそろなの?」

「あ～、言つてないつけ? 田曜田」
。。。

「本当に言わなくていいの? まだ言つてないんでしょ?」

「大丈夫。また戻つてくるから。」

「絶対よ。・・・しつかり体力つけなさいよ?」

「分かってる。あいつら・・・ぶつ瀆してやる。」

「本当に気を付けて。。。検診始めていい?」

「ああ。わりい。話し込んでしまったな・・・。」

富野は俺に体温計を渡し、俺を椅子に座らせる。聴診器を当ててカルテに書き込みはじめた。

「大丈夫そうね。熱は?」

「35・7」

「低いわね・・・。」
「飯は？」

「食べてる。俺の平熱が低めなの知ってるくせにこいつ嫌味みたいに言つなよな。」

「別にいいじゃない。」
「この身体なら特に言つことはないわ。意外としつかりした生活してたのね。」

「・・・はやく終わらせたかったんだよ。」

そして、日曜日。

“また戻つてくるから”と言つた貴方は戻つて来なかつた

10・終わらせたい（後書き）

快斗くん登場ですね。

平次と快斗、どちらを出すか悩みました（ローリー）

話し方とか違つたら指摘して下さると助かります。

感想・メッセージ・評価、励みになつてます

11・置いた銃

体調が良くなつてきたと言つてすぐこ“組織の残党が口曜日に動く”とFBIから連絡があった。

返事はもちひん“行きます”だった。

奴らとの戦いを完全に終わらせることが出来る

。

そつ思つと嬉しくて、氣がゆるんでいたのかもしれない。

それに、まさかあんなことが起きるなんて・・・。

「藤くん、一応この銃を持って行つて。護身用よ危ないと思つたら迷わず使つよ。責任とかは後からなんとかとるから・・・。」

空き倉庫の2階にはキャンティが居て、倒すときに何発も発砲され
て、避けきれなくて3発当たった。

致命傷にはならなかつたものの、痛みがキツい。

意識がとびそ�だ・・・。

その頃蘭は、夕飯の準備をしていた。

1人分だけ。

今日は新一、飲み会なんだって。

テーブルにお皿を置いた時にふとテレビに目が行つた。

さつきまでやつていたバラエティー番組はいつの間にかニュース番組になつていた。

“速報 男が護送中に警察官殴り逃走”といつ字幕だった。

『男は先日検挙された闇の組織の幹部の一人で、警察官の銃を奪つて逃走中です。警察は付近を捜索中で』

これつて。

新一・・・無事だよね?これには関係ないよね?

・・・だって今日は警視庁の人と飲み会・・・

あれ?新一、今まで飲み会は断つてたよね?

お酒に弱いし、薬がアルコールに反応するかもしれないからって。

・・・嘘つかれたんだ？

今はそんなことよりも新一が心配で、電話をかけていた。

（・・・蘭？）

「ねえ、新一、今飲み会なんてやってないでしょ？」

（・・・ばれたか。）

「事件？」

（あ～、もう終わったよ・・・。全部、いよいよもつ待せたらしくないよ。）

「はやく、会いたいなあ。

（今日会えるよ。）

「そうだね。つてかね、杯戸町での組織の関係者が護送中に逃げたみたい。新一がなんともなくて良かった。今、どこにいるの？」

（杯戸町・・・。その関係者つて誰だ？名前言つてなかつたか？）

「名前　　言つてなかつたよ？」

（そりか。蘭、気を付けとけよ。）

「うん。私は大丈夫。新一こそ・・・杯戸町にいるんでしょう？大丈夫なの？」

（大丈夫だよ。心配しなくてッ　　・・・。）

「新一？」

今確かに聞こえた銃声、銃声、銃声。

通話は切れた。

新一・・・? ?

確かに会えると言った君には会えたけど、

再び会つことは叶わなくて、

もう私は待つ必要もなくなつたんだ

。

11・聞いた録声（後書き）

今回更新はやく出来ました(^〇^)
切実に文章表現欲しいです(。。)

ラストの構想出来ました

多分もう少しなので楽しみにして下さご(* 、 、)

2 / 23

12・消えゆく意識

『気が付くと隣の阿笠博士のところに駆け込んでいた。

町野さんなら何か知つてると想つたから……。

「新一は……？」

「飲み会に行つて……。」

「せうじやなくて……本当に居る場所は……？組織と関係あるんじや……。」

「上藤くんが自分でやつしたの？それ……。」

「違います。けど……」ニュースを見て……。」

町野さんはモニコンを手に取り、テレビの電源をつけた。

この時間でニュースをやっているのはどこのチャンネルだろつと考えたが、つけた時にやっていたチャンネルでニュースらしきものをやっていた。

このチャンネルは・・・日売テレビだから確かクイズ番組をやつてゐるはず・・・。

番組変更するほどのニュース?と思つ見る。

逃走中の男は銃を所持しており、杯戸町の空き倉庫付近で銃声が聞こえたという通報が相次いでいます。

「博士、車出して一杯戸町に ! ! 蘭さんは ?」

「行きますー！」

博士は車を出すと、気を効かせてラジオのボリュームを上げてくれた。

「 男は先日検挙された謎の組織の幹部で、特徴は長髪、鋭い目 」

ジン・・・・・！

やつぱりあの組織で間違いなさそうね・・・・。

「富野さん・・・・。新一の後ろで銃声がした気がして・・・・。新一は・・・・。」

「大丈夫。彼ならきっと。あたつたとは限らないでしょ・・・・?」

「でもつその銃声のあと電話が切れちゃって・・・・。」

「工藤くんを信じなきゃ もう。」

突然の激痛に顔が歪む。

左胸、心臓の少し上らへんを撃たれたらしい。

キャンティは倒して柱に縛り付けたはず・・・。

なんでつ・・・?

「久しぶりだな・・・」工藤新一・・・。

「つーお前なんで」工藤新一・・・。

撃つたのはジンだった。

「組織から情報が入ったからな・・・おまえを殺すのにいいチャンスだろ・・・?」

「なんでそんなに俺を殺したがる?」

「殺したはずの人間が生きているのが不愉快なだけだ。さあ、死んでもらおうか・・・。」

パン と嫌な音が響く。

「新一！」

ジンが持っていた銃が落ちた。

的は外れ、足に弾があたった。

快斗がトランプ銃で助けてくれたのか。

「仲間か 、俺はお前の死顔は見れないようだ。」

ジンはそう言いつと落ちて いる銃を拾い、自殺した・・・。

「新一、帰ろ? もう終わつたんだよ・・・。」

「・・・」

新一は足を撃たれた痛みで立てないらしい。

「大丈夫。背負つてくから。」

新一は思つていたよりもはるかに軽く、体が細かつた。

「・・・ありがと。あのさ　　。俺が頼んだこと覚えてるか?」

「覚えてる。でももう帰れるから　　。」

「・・・」

「・・・新一?」

新一は意識を失つていた。

外には警察がたくさんいた。

銃声の通報で、ジンがここに居る確立が高いことという理由だらつ。

待機していた救急隊員がいろいろな機材を持って新一に駆け寄る。

それと、蘭ちゃんも。

「新一！・・・。」

「？」

「しつかりしてよー。」

「快斗に・・・聞いて。」

「え・・・？」

「いめ……。」

最後に見た新一は笑っていた。

すごい血だらけで……痛かったでしょ？

なのになんで……笑ったの？

12・消えゆく意識（後書き）

遅くなりました……

よくわからない所あつたら「めんなさい」。

メッセージありがとうございます。

す「」に励みになつてます

感想お待ちしています（^ ^）／＼

13・朱色の名探偵

新一はジンに最初に撃たれた胸からかなり出血していた。

他にも撃たれたところから流れ出る赤。

9発も弾を受けたようだった。

救急車の中で、すでに新一はショック状態で、

意識がないどころか、呼吸までもしていなかった。

輸血が間に合わない。

誰でも分かる。

出血が多くすぎる と。

救急車が病院に着いて、新一はすぐに運ばれていった。

何分たつただろう?

新一が運ばれてから 。

実際はそんなに経っていない。

こんなに時間を長く感じたのは初めてかもしれない。

1分が1時間にも感じる。

新一・・・。

「 蘭ちゃん。」

足音に全く気付かなかつた。

声をかけられるまで・・・。

「 快斗くん・・・。」

「 『めん。来るの遅くなっちゃつた。』

「 快斗くんも怪我したんだから仕方ないよ・・・。大丈夫?」

快斗も新一ほどではないが、怪我をした。

包帯や絆創膏が身体中にある。

かなり痛そうだつた。

「 新一がこんな時にも、痛いなんて言つてられないよ。」

「 新一・・・。いまどんな感じなのかな。」

「 血が足りないかもつて。」

「 私の血液型、新一と同じだから・・・。」

「止血が出来ないみたいだよ。それに・・・運ばれて来た時には新一・・・ショック状態だったし・・・。」

「それじゃあ、もう新一は・・・？」

病院に運ばれて3時間。

深夜に新一は逝ってしまった。

私と、子供を残して。

寝かされている新一を見ると、すごいたくさんのが傷跡があった。

足がすくんだ。

見るのが怖かつた。

新一の“死”を受け入れたくなかった。

肌は透き通るよつに白い。

もう呼吸も脈も感じられない。

新一の頬は冷たかった。

もつあの優しい声は聞けないんだ・・・。

新一・・・。

私には絶望の色しか見えなかつた。

13・朱色の名探偵（後書き）

最初に言つておきます。

ごめんなさい（ーー;）

私ですが、部活を辞めたり、
新学期なので忙しかつたり。rz
なんとなく下書きしたプロットもどつかに消えて、ヤル気が消え、
気付いたら2ヶ月経つてました。

覚えていますか？（：^ー^A

ものすごい亀更新で新一も・・・なんて私、最低ですよね・・・

久しぶりにログインしたら、
メッセージが貰えてて、
感動しました＼（^○^）／

更新待つてた方、ここまで読んでくれた方、
ありがとうございます！

次の更新も頑張ります（^▽^）

14・私たちは味方

次の日のテレビは新一の「とばかりやつていた。

各テレビ局が特番を組んで、

新一が今まで解決した事件や、過去のインタビュー映像を流していた。

「工藤新一、空白の1年の裏側」

そんな内容のものも少なくなかった。

見ると、その裏側といつのははあくまでも誰かの考察にしか過ぎなかつた。

新一は、居なくなつていた時のことを詳しくは教えてくれなかつた。

“危ない組織があつた”

といつうことだけ聞いた。

私も聞いてないのに、テレビ局が知つてゐるはずがない。

・・・でも、新一の映像を見ると、

新一は死んだんだと分かっていても何だか近くにいる気がして・・・
このまま普通に新一が現われるんじゃないかつて・・・

なかなか受け入れられなかつた。

「新一君、痛かつたでしょうね・・・。9発つて聞いたけど・・・。

「

「お母さん・・・。」

「あの探偵ボウズ、蘭を残して逝きやがつて
かねえぞ・・・。」

「そうだな。あいつは蘭さんと子供をどうするつもりだつた
んだ?」「ただじゃお

「お父さん・・・優作さん・・・子供は生みたいです。新一との子
供だから 新一が居なくとも・・・1人でも・・・頑張ります。」

「

「蘭ちゃん!生んでくれるのねー。ありがとー!そ・れ・に、1人
でなんて言わないで?私たちがサポートするわよ。ね?優作。」

「ああ。新一の代わりにはなれないだろうが、出来る限りのことを
しよう。」

「有希子さん。優作さん。ありがとうございます・・・。」

「毛利のねーちゃん、ちょっとやばいんとかわい~。」

やつれていた。

ところよりも、

痩せた・・・?

和葉と平次は新一の葬式に参列し、異変に気がついた。

なんで、泣いてるの？

みんな、黒い服着てる

園子に連れていかれた

そう言ったんだけど

行きたくなかった

新一のお葬式には

「させきとひといがい」

14・私たちは味方（後書き）

この先どうなるんでしょうかね

・・・ 私次第ですが（笑）

評価、感想、メッセージ
下さい下さい（＊、＊、＊）

5 / 25

15・忘れられない

数ヶ月後　。

子供は無事に生まれた。

女の子。

でも新一の面影もある。

新一・・・。

私は、まだ新一のことを忘れないでいた。

あ、別に忘れるつもりもないんだけどね。

なんていうか・・・。

新一がね、いきなり電話とかしてきそつだなって

まだ・・・生きてるんじゃないかなってね。

絶対ないことは分かつてる。

自分の目で　　見たから。

でも高校の・・・2年の時に新一が居なくなつてた時と同じ感じが
するんだ　。

ピココリコ・・・

(電話？非通知だけど・・・。)

「よお、蘭、元気か？ちょっと話したい」とがあるから、家まで来てくれ！」

相手はそれだけ言つと電話を切つてしまつた。

。

声は、新一だつた。

話し方も

・・・？

子供を連れ、新一の家まで行つた。

門が開いていたので、勝手に入つた。

すごい、久しぶりの、新一の家。

結婚してから、引っ越ししたから・・・。

「蘭ちゃん。」

「快斗くん？？」

「『』めん、新一の声使つちやつて・・・。」

「ちつのは・・・快斗くんか。」

「うざ。だから説明しなつかな……。いつも皿をつぶして……。」

「皿をあたると……。」

「怪盗キッド……？」

「俺ね、つこ最近まで怪盗キッドだつたの。」

「だつて もつと皿からキッドは歸たよね?」

「それは父さん。組織に殺されたけど。俺はその組織が狙つてる宝石をとられないうにするために、キッドをやってた。で、その組織が新一の追つていた組織と同じだつたんだよ。」

「 組織? なにそれ……?」

「やつぱり聞いてないよね。これ、新一から頼まれてたんだけど。」

「」

さつきまで何も持つていなかつた快斗くんの手には一枚のDVD。

「じゃあ、新一の最後の声、聞いてみるか。」

15・忘れられない（後書き）

こんにちは！

大体の流れをまとめといた紙を紛失しました
大丈夫。多分変わらないはず。

たぶん。r z

次回は新一登場！？（^ ^）

話とは関係ないですが、

今度学校で体育祭があります。
やだなー、やだなー（ ）

6 / 1

蘭 。

これを見てるひといとせや、

オレ 。

死んだつてことだよな?

ごめん・・・。

結局、オレは蘭に迷惑ばっかりかけてるな・・・。

待つなつて言つたけど・・・。

本音言'うとな、

待つて欲しかつた。

生きて帰つて蘭と幸せになりたかった。

幸せにしてやりたかった。

でも、オレはもう無理になつちまつたんだろう?

・・・。

子供、もう生まれたんだろう？

見たかったよ

名前もさ・・・考へてあつた。

言わないけどな。

オレが居なくともしつかりやつてけるよな？

蘭なら大丈夫だよな？

蘭のことだから、

新一が居なきや無理

とかつて言つかもしれないけどな。

大丈夫つて思わないと、オレ、

死にきれなさそうだしな。

『めん。

辛い。

お別れなんてしたくない

。

ずっと蘭と居たかった

。

幸せになれよ。

「

新一は泣いていた。

普段泣かなかつたのに・・・。

「快斗くん、ありがとね。」

「うん。なんか、ごめんね。俺帰るよ。」

「ありがと。じゃあ、また今度。」

・・・

新一。

新一・・・。

(死のうとしてんのか?)

「…」

(やめとけよ。子供面のだから…・・・。)

懐かしい声。

聞き間違えるはずがない。

これは、新一の声

。

16・遺された言葉（後書き）

……「あなたさー。

久しぶりです。

そして短いですよね……（

文章ぐだぐだで「あなたさー（、；；）

17・居ない筈の人

「蘭ちゃん、元気やろか?」

「それが気になるからきたんやろ。」

平次と和葉は東京に来ていた。

最後に見た、やつれていた蘭のことを不安に感じて。

少しでも元気になつてほしくて。

それに、出産祝いも兼て。

「子供は工藤に似とるか、毛利のねーちゃんに似とるか、どうや
と思つ?」

「女の子やろ? そりややつぱ蘭ちゃん似やと思つわ~。」

「工藤も結構美人やから、子供が工藤に似とつてもかわええんや
なあ~。」

「といひで、いいん? うちらアポなしやで。」

「やつとなんとかなるやない。」

「蘭ちゃん たのむ~？」

「和葉ちゃん、服部くんーー。」

「アポなしですまんなあ。」

「ん、いいよ。とつあえず上がって。
て。紅茶入れてくるね。」

適当にへりひこで

「蘭ちゃん、またやせたな。・・・平次へりかしたん？」

座つたソファーでくつろこでる和葉をよそに、平次は回じといふを
ずっと見つめていた。

「なあ和葉。いま、ねーちゃんの後ろになんか見えへんかった？」

「気付かんかったよ。」

「そか・・・。」

「なんかみえたん?」

「ん、ちょっととな。」

今のは・・・。

今日は泊まつて確かめんとなあ

平次は新一が使っていた部屋で寝ることになった。

「「めんね、服部くん。他の部屋散らかつてるし、此処しかなくて
平次は新一が使っていた部屋で寝ることになった。

」。

「いきなり来た方が悪いんやから、気にせんでええよ。泊まらせて
もひて感謝やて それよりも、ねーちゃんはええんか?」

工藤が使ってた部屋。

もしねーちゃんの立場やつたら、誰もこの部屋にほいれない。

工藤が消えてく気がして。

ねーちゃんはええんか？

「え、だつて新一は此処・・・っ！」 し、新一は、この部屋ほとんど使ってないの・・・新一、事件とかあんまりこの家に・・・居なかつたし。」

「そうなん・・・。」

「え、ええ。じゃあ、何かあつたら教えてね。おやすみなさい。」

此処に？
“え、だつて新一は此処に・・・”

「じつこいつは・・・せひとじひで

此処に・・・居る？

工藤、もしかしてねーちゃんに取り付いてるんとひやうが？

それともねーちゃんが引き止めてる・・・?

考えすぎなんかな・・・

工藤・・・。

17・居ない筈の人（後書き）

「こんにちは（ ）
覚えてますか？？（ ； ； ）

2ヶ月以上ぶりです・・・。

感想・メッセージ下さい

10/1

豊田

ただ一つ、確かめたこと。

「なあ、上藤やうやうのやうへ。

「え、いきなりじつしたの？ 新一は・・・

「ちゅうと平次一いぐらなんでも蘭ちゃんに失礼せとか思わんのー。」

？

そりや、普通は聞かんわ。
ただ。これは普通とけやつ。

「・・・隠す」となこやふ。」

「 ひ。やう・・・だよね・・・。新一・・・出でやがへ

やつぱり。

俺の予想は間違つてなかつたんや。

「え・・・蘭ちゃん・・・これ、どうこうなん?」

「新一ね・・・死んじゃつたけどまた」いつしに戻つて来てくれたの。います」
「幸せなの。だから邪魔されたくなくて・・・みんなには秘密にしておこうと思つたんだけど」

「。

「邪魔なんてせえへんよ。」

“ 気配、消してたのに・・・なんで分かつたんだ・・・”

「・・・この氣がしたんや。ついすら　　ねーちゃんの後ろに影見えどつたし・・・ダメ元で試してみたんや。」

“ そつか・・・。

”

「 また会えるとは思つてなかつたで・・・。」

“ また・・・話せるとは思わなかつた・・・。 ”

「 ・・・ちよつと工藤と2人で話せてしまつてもええか? 」

「 うふ。 じゃあ私、席はずすね。 」

「 単刀直入に聞くで。 なあ工藤。 なんで此処におるんや・・・? 何
か理由があるのやひつ。 」

“ オレもわからねえ・・・ただ、オレが居ると蘭が『元氣』じゃなくな
る・・・ ”

「 え?・・・むじり明るくなつてゐるよひて見えるんやけど。 」

“ ‘ 表面’ だけな。 ”

嫌な予感。

「…………もしかして工藤…………。」

“簡単にいづとな、多分、オレが居ることで蘭の生命力が減つてゐる”

「ちよつと言い方悪いけど堪忍な……。工藤がおつたらねーちゃんが死んでしまつちゅうことなんやろー? なんでねーちゃんから離れないん! ?」

“離れられない”

「なあ。もしかしてねーちゃんの周りにしか居れないんか! ?」

“よくわからぬ一けど、多分……な。それに、蘭自身も眞付いてるんじゃないか? オレが現われてからの身体の異変に……”

・・・助けられないんか？

また・・・失つてしまつ？

どうすればいいのや・・・。

18・彼女の後ろに（後書き）

今日はHalloweenですね（・・・）

私ずっと“ハローウイン”って
言つてました・・・。

“ハロウイン”なのね（・・・）

今日は新一登場。

服部の二セ関西弁は聞き流してして下せ～（ 口・・・）

感想・メッセージありがとうございます(*^o^*)

跳ねて喜ぶのでもた下せ～（笑）

19・触れられない

「ちよお、詳しく述べしてくれや。」

覚えてる範囲でええから、

死んでまうあたりから……。

“いろんなところ撃たれて……ジンに撃たれたあたりから、もう痛いとか感じなくて……。

快斗と話してゐる時にいきなり周りがやけに静かになつて……。

死ぬ前に最後に見たの蘭なんだ。

まだ伝えたい事があつた気がするのに、目の前が真っ暗になつて。なにも聞こえない。

気付いたら、俺の葬式で。蘭が居て。いつもの蘭なら泣くのに、俺の遺影みて立つて……。

ああ、俺死んだんだ……。

そしたらまた周りが暗くなつた。

次気付いたら、蘭が目の前に居た。思い詰めた顔して。

状況はよく分からなかつたけど、嫌な予感がしたんだ。

蘭が死にたいつて考へてるんじゃないかつて思つて、話しあげたつて聞こえないつて分かつて話しかけた。

(死のうとしてんのか?)

「...」

蘭は、気付いてくれた。

(やめとけよ、子供居るんだから...)

蘭には声が聞こえてるのか。姿は?

「ビニ... ここの?」

(蘭の横にいる。 . . . さすがに見えないか。)

「ついてるね。」

(え?)

「血... ついてるね。」

俺が着てこる服は死んだときと同じで、血だらけだった。

（ つ。すゞこな、この血・・・。 ）

言われるまで気付かなかつた・・・。

落ち着け、俺。

いつでも冷静でいないと

まともな推理が出来ない。

どうして、俺は・・・。

「痛くない？」

（全然。もう幽霊だら、この体は、何も触れないし。）

「じやあ・・・。」

（蘭。来こよ。）

俺が蘭を抱きしめようと両手を広げた。

蘭はそれを応えようと俺に近づいて

・・・。

次の瞬間には蘭は俺の後ろにいた。

通り抜けたんだ。

すごい悔しかつた

(なあ、蘭。)

「なに?」

(子供の名前、教えてくれないか?)

「その前に、新一がつけたかった名前は何?」

(まみ。女ならそれがいいと思つてた。)

「うん・・・。」

(・・・実際は?)

「まみだよ。しぃじつって書いてまみ。」

(まじ・・・かよ。)

「新一ならそりやつてつけるかな～って思つて。ちゅうどだけ反対されたんだげじね。」

(反対つて、父さんと母さん?)

「有希子おばさんは、『蘭ちゃんが好きに決めていいのよ』って言つてくれて。優作おじさんが『私と新一の名前をとつて 新作つてのはどうかな?』って言つたの。」

(はつ！？父さんおかしいだろ！産まれたの女だし、もし男だとしても新作つてなんだよ。)

「結構本気だつたみたいだよ。」

(父さん、趣味悪い・・・。)

蘭は俺の事を誰にも言わないでいてくれたし、誰にもばれなかつた。もひりん父さんや母さんにも気付かれなかつた。

（気配消してたから。）

服部と遠山さんが来た時も大丈夫だと思つていた。
なのに服部は俺の方をずっと見ていた。

服部は蘭にかまかける・・・。

もつ鬱れられないと思つた。

・・・こんな感じでどうだ?

何か聞き呪つなことあるか?"

「つひこじ」と思こ出れかねすまん。・・・やつ残した事があるんや
ないか?」

(やつ残し・・・?)

「“伝えたい事”ってなんや?覚えとる?」

(ああ。あの時は朦朧としてて分からなかつたけど、いまならまつ
わつ覚えてる。)

やり残したことまだ一つ。あれを蘭に言つてなかつたんだ
。

19・触れられない（後書き）

来週の土曜日は高校の文化祭があります。

喫茶店で紅茶を入れまくります（*、*、*）
ダージリン

あと、にんじんケーキとあんパン売ります。

まじで大変（、；、；、）

メッセージもらい&ねとやる気がアップするのでよひしへお願いします（@^_^@）

よかつたらポイント入れてね

ダメ出しも待つてます。

優しくしてね（^-^）

やり残したことはただ一つ

。

「なあ、工藤……。そのやり残したことひきついをやればいいんとちやうん?」

(……多分そつなんどううな ……。)

はやく言わないと ……。

しかし……既に……。

(蘭……俺や……ずっと言ひてなかつたけど……コナンだつたんだ……トロピカルランドに行つた日から……俺が帰つくるまで。ずっと……。)

元に戻つたあともずっと隠してきた、俺の一番知られたくない秘密。

……ずっとと言えなかつたこと。

「嘘……つかないで。別人……でしょ?……。」

（う・・・。）

「信じなこよ？」

少し困った、いまにも泣きそうな顔で。

「・・・もし新一がコナンくんだったとしてさ・・・それを私が認めたなら、新一、消えちやうんでしょ？？また、私の前から居なくなっちゃうんでしょ？」

蘭が認めたら、

言い残したことはなくなつてしまひ。

そしたら多分俺は・・・。

（つなんで。 なんで蘭にそんなことが分かるんだよ・・・。）

「分かるよ。分かる。何年一緒にいたと想つてんの・・・？」

（蘭、お前何考えてんだよ！？そんなことしたらおまえが消えちまうだろーが！）

俺がこのままいたら

蘭を・・・蘭を連れていくことになつまつ・・・。

「・・・もへ、いこよ。新一。いこの・・・。」

（俺は消えてもいいんだよ。もう死んでるんだよ。蘭は・・・蘭は
まだ・・・お願いだから・・・。）

蘭がふつと笑う。

「もう、終わりなの。
」

知つてたよ。新一が「ナン君だつてこと。なんとなく気付いてた。なにもかもが似すぎなんだよ。言わなかつたのはね、どんな姿でもすつと居てもらいたかつたからなんだよ

(蘭)めん・・・俺のせいで・・・

「新一が連れていくてくれるなら……」

なに謝つてるの・・・?

俺が居なければ
・・・。

“やつと、私たち触れるんだよ
？”もう、ずっと一緒にね。

新一は涙を流していた。

蘭は嬉しそうだった。

20・一人で一緒に（後書き）

いつも遅くてごめんなさい。

それでも読んでくださるみなさんありがとうございます。

あと1、2回で完結させたい。

次話が書きたくて仕方ない

でも掛け持ちは出来ないorz

天空の難破船のマンガ出ましたね／＼(^O^)／＼
下巻が出るの楽しみです

「はやくつー今日は大事な日なんだからねー。」

「分かってゐるわよ、だつて何着てくか迷つじやない・・・。」

ピンポン

「ほり、来ちゃつた。支度はやくしてねー。」

「久しぶりやなあー真実ちゃんーさつすが工藤と毛利のねーちゃんの血に流れとるつて感じやなーめつちやべっぴんやもん。それに比べて和葉は・・・溜め息もんやで。」

「えーっと・・・」

「ちよおオトン黙れや。真実が困つてゐんがわからんのか。」

「あー、スマンスマンーこまの和葉こま内緒なー。」

「平次、もう一回ゆづてみ！全部聞いてたんよー。」

「うわ、和葉いたんか！」

「最初から居たで！一緒に来たのに何ゆづてるん！？」「ちでゆつ
くり話そつか？なあ？」

「わ～、タイム！タイム！」

「・・・うひのオトンとホカンつるむへでい」めん。」

「気にしなくていいよー。」

服部平次と遠山和葉はあのあと結婚し、子供を産んだ。

名前は服部和輝。

今は15歳で、高校1年。

眞実は17歳、高校2年。

「あ～、今年もまた報道されるんかな？」

「多分ね。」

「記者じっぴーおるんやうなー。」

「世間は忘れてないんだよね。私のお父さんとお母さんのこと。」

“私、何にも覚えてないのに”

今日は大事な日。

2人が眠っている所に行く日。

「工藤。」

「蘭ちゃん。」

また今年も会いに来たよ。

「真実さん…もしかして隣に居るのは…“あの組織”の一員だった富野志保さんですか？真実さん、大丈夫なんですか？お父さんはこの人に殺されたんですよ？」

「…何で眞さんはそういう事ばっかりいうんですか？もう何年もたってますよね…？それに私は、そんな風に思ってないです…。」

「それは富野さんを許すことですか？」

「許すも何も私は何もされてません。それに、元は父の軽はずみな行動が原因です。薬を作っていたのは命令され、組織に歯向かえなかつたからです。志保ちゃんが直接殺したわけじゃないし、毎年この時期になると父の特集番組やつてますよね？眞さんがそのことについて知らないはずはないと思うんですけど…。」

それに、私は両親のことを覚えてないんです。物心ついた時には、両親は居なくて、優作さんと有希ちゃんと暮らしていました。優作さんと有希ちゃんがロサンゼルスに行つて、一人暮らしになつてから、志保ちゃんが世話をしてくれるようになりました。私にとつては親みたいな存在です。悪く言わないで下さい。」

「セツキの格好よかつたで。」

「 平次おじさん。」

「 富野のねーちゃん、口には出れんけどな、喜んでると思ひで。」

「 セツ・・・ですかね。」

「 工藤が死んで、毛利のねーちゃんも死んで、みんなショックやつたけどなあ、富野のねーちゃんが一番苦しんだと思ひで。だから、真実ちゃんがかばってくれたんは嬉しいことなんやで。」

「私は」

「 何や?」

「一度聞いて見たかつたこと。」

「 私は両親に似てますか?」

「自分では分からなーから。」

「んー、せやな。似てるか似てないかやつたら似てるで。」

「どっちに・・・ですか？」

「どっちもや。

大切な誰かを守るうとするとこりは工藤そっくりや。
・・・守られてる方は自覚ないんやけどな。
周りを気遣う優しさがあるんは毛利のねーちゃん譲りやな。工藤は
夢中になると周りなんか見えてなかつたで。」

そつか
似てるのか・・・。

「ありがと、平次おじさん。」

相談出来なかつたのは

悔しいけど・・・。

決めたよ。決めた。

将来に関わる大事なこと。

2-1・両親の代わり（後書き） (あと書き)

遅くなりました～（・・・・・）

次回、最終話ですよ*

投稿は・・・明日（12/24）の0時を予定します^ ^

感想、メッセージ、評価ください！
めちゃ喜びますよ～！

次書いてほしい設定があったら
リクエストしてください（ ）

12・23

22・やつたこと

「2人に似てるからほんまべつぴんさんやな。ビヤヘ嫁になつてく
れへん?」

「平次さんには和葉さんが居るじゃないですか・・・。」

「あー、ちやうちやう。まあ 真実ちゃんが嫁になつてくれるなら嬉
しいんやけどな。」

「じゃあ・・・。」

「和輝や。」

「えつ」

「和輝に真実ちゃんは釣り合わんない。真実ちゃんの方が優秀やもんない。」

「ちよお待てやーなに勝手にそんな話してんねん！ 真実に迷惑かか
るやないー。」

ねえ、見えてますか？

私は今幸せです。

こんなにいい人たちがまわりに居ます。

でもね、ちょっと寂しい。

私はテレビと写真でしか見たことないから・・・。

・・・嘘。

ちよつとじゃない・・・。

寂しいよ。

テレビで見れるのはお父さんだけ。

それは事件を解いたあとの会見とかのものばかりで、

それは結局オモテの顔。

はやく、会いたい。

待つてね・・・？

それとね、

私、決めたんだ。

探偵になる。

お父さんと同じ探偵だ。

今日みたいに記者に嫌なことを言われるよりもお父さんと一緒にいる方がいい。

頑張るよ。

お父さんを越してみせるから。

見てね・・・。

22・せつたいじと（後書き）

1日はやいけど、

メリーカリスマス（ ）

我が家にサンタは小学6年から
来なくなりました（。 。 ）笑

最終話ごめんでした？*

感想、メッセージ、評価ください！

喜びます（・・）

次回作のリクエストも受け付けてます
書く保証はないけど（ ）笑

それじゃあ、よいお年を～

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2178j/>

遺されたモノ

2010年12月28日16時25分発行